

【研究論文】

「世間」という概念を 日本語学習者にどう教えるか

マスデン真理子

要 旨

「世間」という概念は、日本文化のキーワードだが、日本語学習者にとって「世間」のわかりやすい定義がない。本稿では、日本語学習者に「世間」という言葉の概念や用法を教えることを目的として、「世間」と類似語の「社会」を対比させながら、用例の分析を行なった。その結果、「社会は組織であり、世間はまわりだ」という違いが明らかになり、さらに以下のような特徴を抽出した。

- ①「社会」には自分が含まれるが、「世間」には自分は含まれない。
- ②「社会」の範囲は一定だが、「世間」の範囲はあいまいである。
- ③「社会」には組織があるが、「世間」には組織があるとは言いがたい。
- ④「社会」は変革できるが、「世間」は変えられない。

これらの特徴を踏まえ、日本語の授業で「世間」という言葉を実際にどのように教えたらよいか、について考えた。

1. はじめに

筆者は日本のコミュニケーションの特徴をテーマに、中級レベルの日本語力を持つ日本語学習者を対象とした日本語会話の授業を行っている。日本人のコミュニケーションの特徴について語るとき、多様な個人を十把ひとからげにしたステレオタイプ的な見方を教えることは、現実のコミュニケーションをかえって損なう恐れがある。そのため授業では日本人学生たちに話し合いに加わってもらい、日本的とされるコミュニケーションの特徴と目の前の日本人の意見を比べあわせながら、その特徴がどの程度自分のまわりの日本人にあてはまるかを学習者自身に考えてもらうことにした。

日本のコミュニケーションの特徴を探る方法として、授業では「恥」「甘え」「察し」「建て前と本音」など日本文化の鍵概念を示す言葉を取りあげることにした。授業では文献などの定義や説明は最小限にして、「甘え」などの鍵概念の意味がわかるようなスキットを、日本人学生と留学生の小グループに作ってもらいクラスで発表させた。各々のグループのスキットを見るな

かで、「甘え」や「察し」などの概念が具体的にどのような行為をあらわすのかが、留学生にも自然に理解されていく。「甘え」などの概念は日本文化に特有のものだと言われるが、それらの概念が示す現象は人間にとって普遍性があり、外国人にとってもそれらの概念の理解はそれほど難しくはない。しかし、これらの日本的とされる概念の価値判断になると、どうしても自文化の価値規準に照らし合わせて考える傾向が強くなり、甘えたり察したり世間に恥じないように行動することが、良いとは思えないという意見が欧米の留学生に多かった。このようなことから、それぞれの文化でよしとされる行為の価値規準の枠が、どのような言葉の影響を受けて形成されているのかを考えてみる必要があると感じた。

この授業で筆者にとって特に印象に残ったテーマは、「恥」の問題である。「恥」については、ルース・ベネディクト（1972）が西洋は罪の文化であるのに対し日本は恥の文化だと特色づけたことは有名である。「恥」と「罪責感」について、セルジュ・ティスロン（1992：249-250）によると、主に次のような相違点がある。

罪責感については、超自我に服している主体はみずからの罪をあがなうことができ、共同体内部にみずからの位置をふたたび見出すことができる。しかし、恥については、主体は社会集団から決定的に排除され、同時に精神的にも崩壊する。

この「恥」と「罪責感」の違いを例証するような話を授業で留学生から聞いたことがある。この学生が子どものときクラスで隣に座っていた男の子に消しゴムを食べられた（ほんとうに！）。そのことを家に帰ってから母親に話し、新しい消しゴムを買ってほしいと言った。しかし、この母親はそんな馬鹿な話は信じられないと言ってお金をくれなかった。この子はお金をもらえなかったので、店で消しゴムを万引きした。母親は娘が新しい消しゴムを持っていることに気づき、娘に聞いたところ万引きしたことがわかった。この母親はまず娘の消しゴムが食べられたという話をはなから信じなかったことを娘にわびた。それから、娘を店へ連れて行き、万引きしたことを店の人に謝罪させた。そこで、改めてその消しゴムを買ったという。はたして、「恥」を気にする人は自分の子どもの万引きが発覚した時、その子を店に連れていき謝罪させるという手続きがとれるだろうか。そしてまた、「恥」の意

「世間」という概念を日本語学習者にどう教えるか

識が強い人は、たとえ謝罪しても、万引きを犯してしまったという恥がいつまでもつきまとい、そのことをまわりには隠そうとするのではなからうか。

恥を意図するのはまわりの人々に対してであるが、この「まわり」の社会集団を示す言葉として、「世間」が古くから使われている。親が子どもを躾けるとき「世間に恥じないように／笑われないように」という表現が用いられてきた。今では「世間」というやや古臭い言葉よりも「まわり」や「みんな」などの言い方に変わりつつあるようだが、このような「まわり」を示す言葉を使うことで「恥」が主体に内在化していくのではないかと筆者は感じる。本稿では、古くから使われている「世間」をとりあげ、「世間」という言葉を授業で日本語学習者にどのように教えたらよいのかということを目的とし、「世間」を「社会」という言葉と対比させながらその用法を分析し、世間とは何かについて以下のような筋道で考えてみたい。

2. 「世間」とは何か ～先行研究から～
3. 「世間」の用法
4. 日本語学習者に「世間」の概念や用法をどのように教えるか（教案）

2. 「世間」とは何か ～先行研究から～

2-1 辞書の定義

「世間」と「社会」は言葉の定義が重なるが、どのように重なり、またどのように使い分けたらよいのか、という説明が辞書には不十分である。ここでは、初中級レベルの日本語学習者のための辞書と、上級レベルにふさわしい国語辞典の両方の定義を見てみよう。

まず、初中級レベルの日本語学習者のための辞書である“Basic Japanese Dictionary”（凡人社）には、次のような訳語がのっている。

- ・世間 … world, people, the public, society
- ・社会 … society, the world （下線は筆者）

この辞書の訳語だけから解釈すると、「世間」も「社会」も world や society という共通語があり、「世間」は「社会」を内包しつつ、people や the public の意味が加わっている。

次に、広辞苑（第四版）は「世間」と「社会」を主に次のように定義している。

- ・世間 … ①有情の生活する境界。有漏法の異称。②天地の間。あたり一帯。③人の世。人生。④社会。世の中。世の中の人々。⑤世間づきあい。交際の範囲。そのための費用。⑥くらし向き。
- ・社会 … (society の訳語) ①人間が集まって共同生活を営む際に、人々の関係の総体が一つの輪郭をもって現れる場合の、その集団。諸集団の総和から成る包括的複合体をもいう。自然的に発生したものと、利害・目的などに基づいて人為的に作られたものがある。家族・村落・ギルド・教会・会社・政党・階級・国家などが主要な形態。②同類の仲間。③世の中。世間。家庭や学校に対して職業人の社会をいう。（下線は筆者）

これらの訳語や定義だけでは、「世間」と「社会」の言い換えが可能な場合がありそうだが、実際には「世間」を使った以下のような慣用表現は「社会」では言い換えができない。

「世間知らず」「世間体」「世間並み」「世間話」「世間様」「世間の噂／評判」「世間に後ろ指をさされる」「世間の指弾を浴びる」「世間の目を気にする」「世間に顔向けができない」「世間がうるさい」「世間の口に戸は立てられない」「世間に通用しない」「世間に笑われる／恥ずかしい」「世間をはばかり」「世間を騒がせる」「渡る世間に鬼はなし」「世間知らず」「世間のならわし」「世間のしがらみ」「世間離れした」「世間が広い／狭い」など。

同様に、「社会」を使った以下のような複合語も「世間」では代用できない。

「社会組織」「社会人」「社会制度」「社会政策」「社会問題」「社会運動」「社会復帰」「社会的地位」「社会生活」「社会保障」「社会福祉」「社会勉強」「社会情勢」「社会現象」「社会調査」「社会事業」「社会環境」「社会的責任」「社会思想」「社会活動」「社会性」「社会集団」「社会奉仕」「上流社会」「封建社会」「市民社会」「欧米社会」

「世間」という概念を日本語学習者にどう教えるか

「競争社会」「高齢化社会」「社会主義」「社会党」「社会学」など数多い。

以上、両方の辞書の定義では、「世間」と「社会」は意味が重なるが、どのように使い分けたらよいか判然とせず、日本語学習者には分かりにくい。

2-2 「世間」に関する先行研究

上述したように辞書では「世間」と「社会」の使い分けについての説明が日本語学習者にとって分かりにくい。「世間」と「社会」という概念が日本でどのように使われているかについて、より深く知るために社会学など、さまざまな視点からの考察を次の8人の研究者の著書から簡略に紹介したい。

「世間」を本全体のテーマとして論じているのは、後述の井上、阿部、佐藤であり、他の著者は著書の一部に世間に関連することを述べている。ここでは、著書の初版の年代順に紹介するが、各々の著者の専門分野は以下に示すように多岐にわたっている。

| 〈著者名〉 | 〈出版年代〉 | 〈著者の専門領域〉 |
|-------|-----------------|------------|
| 米山俊直 | 1976年 | 文化人類学 |
| 井上忠司 | 1977年 | 社会心理学 |
| 福武直 | 1993年(初版は1981年) | 農村社会学 |
| 中山治 | 1988年 | 臨床社会心理学 |
| 阿部 藤也 | 1992年~2000年 | 西洋中世史 |
| 氏家洋子 | 1996年 | 言語文化学 |
| 佐藤直樹 | 2001年~2002年 | 刑事法学、犯罪現象学 |
| 田中史郎 | 2002年 | 日本経済論 |

① 米山俊直(1976)～文化人類学の視点から～

米山は『日本人の仲間意識』(1976)の中で、現代社会ではアカの他人に囲まれて生活していることから、生活していくうえでかわりを持つ世界である「世間」を「アカの他人」と見た使い方をしている。そして、「仲間」にはマキシマムの配慮をはらうが、「世間」にはミニマムの配慮しかしないと述べている。これは、「世間に対して顔むけできない」ような行為とは、殺人とか強盗とか放火などの凶悪犯罪であり、このようなミニマムの道徳に反しな

い限り世間とのつきあいはできるからだという。

米山の言う「仲間」は後述する阿部の言う「世間」に重なる部分が多い。「仲間」は年賀状の交換などの社交や冠婚葬祭のつきあいがあり、恩や義理のしがらみがありわずらわしいが、人間らしいつきあいがある点を評価している。米山は仲間が、一心同体といったベタベタしすぎた関係であるのも嫌だが、あまりにも合理的にドライにわりきったつきあいもまた人間らしさがないと述べている。米山は仲間の関係が永続的ではないことを、次のようなたとえで説明している (p.121-122)。

個人はちょうど、川の流れのなかの一粒の砂のようなものだと思う。それはほかの砂粒といっしょになり、またはなれ、という運動をくりかえしながら、上流から下流へと流れてゆくものであろう。仲間というのは、その流れをある時点でとらえたとき、そこに見ることのできる人々の集合というものでしかない。つぎの瞬間には、まったく別のまとまりかたになっても、しかたのないものだと考えておくほうがよい。

米山(p.123)は「仲間は自分からそれに加わり、自分が仲間の一員になってゆくという主体性があるとはじめてできる」というように、建前としては積極的に自分の意思で仲間の一員になるという点を強調しているものの、上述の砂粒のたとえにあるように本音としては、川の流れの中で個人は、その流れという抗いがたい力に身をまかせるしかなく、古い仲間から新しい仲間へと変化するのはしかたのないことだと見ているのではないだろうか。このようにいつのまにか仲間になるというとらえ方は、後述する阿部謹也(1995: 16-17)の世間の定義の次の一節と相通じるものがある。

個人が自分からすすんで世間をつくるわけではない。何となく、自分の位置がそこにあるものとして生きている。

② 井上忠司(1977)～社会心理学の視点から～

井上は、『「世間体」の構造』という著書で、社会心理学者の立場から「世間」をクローズアップしてとりあげた。「世間」という言葉は、もともとはサンスクリット語の loka という言葉の訳語であり、本来の意味は自然界の出

来事と人間界の出来事だったが、日本に入ってから人間界の出来事が主となったという。世間はどのような人々を指すか、という点について、米山とは異なり次のように定義している。

世間はウチとソトの中間、つまり自分の仲間ではないけれど、かと言って赤の他人でもない人々のムレを表す。

中根千枝(1967)が指摘しているように、日本社会の人間関係は「ウチ」と「ヨソ」を峻別し、「ウチ」には非常に親切だが「ヨソ」には冷たく非社会的である。井上が「ウチ」と「ヨソ/ソト」の中間的な存在として「世間」という言葉を当てはめたのは重要である。このような中間的な存在を、対人恐怖症を研究する笠原嘉(1977)は、「半知り」と名づけ、「世間体」を極度に気にする対人恐怖症は、身内でも赤の他人でもない「半知り」的人間関係で生じると指摘している。また、後述する中山治は、「ウチ(身内)」、「ソト(半知り)」、「ヨソ(赤の他人)」という言葉を使って、一般に人は「ソト」の人々に対し過度の配慮をしがちであると述べている。

井上はさらに世間について、世間が主観的にとらえられたものであるが故に、とらえどころのないものだということを次のように表現している。

人はいったい、どこから「世間」とよび、どこまでを「世間」とよぶのであろうか。そのテリトリーを規定するものは、客観的に存在するところの基準ではけっしてない。それはきまって、私たち個々人の主観のがわにあるからだ。「世間」はいきおい、漠然とした、あいまいなものとならざるをえないであろう。

世間の範囲があいまいであるという点については、本稿の世間と社会の対比の項で考察を加えたい。

③ 福武直(1993)～農村社会学の視点から～

福武は『日本社会の構造』において、戦後の民主化政策により戦前のムラ社会と家制度は次第に崩壊していき、建前としては慣習にとらわれない生き方を求めるようになったものの、本音ではいまだに慣習に同調するのが無難であるとする生き方を選んでいると指摘している。

福武は日本人の生活行動は、内面的な良心や合理的な判断によって律せられるよりも、慣習や権威によって制禦されるという特徴があるとして、これらの特徴を「慣習の優位」や「権威への服従」と要約している。

「慣習の優位」がどのように育成されるかについて福武は、ムラの社会で世間体や義理にしばられた親たちは、子どもを躾ける際に、行動の是非善悪を説いて自主的に行動を律するようしむけるよりは、「笑われるから、恥ずかしいから、してはいけない」ということを躾けの基本としたため、自己の判断によって行動し自己の主張を貫くような自我の成長は、幼児のころより阻止されたと説明している。

このような「慣習の優位」は現代においても続いている。世論調査をするに「友引に葬式を出さなかったり、仏滅に結婚式をしなかったりすること」を迷信だからやめたほうがよいと思う人は少なく、多くの人は習慣だから仕方ないと思っているという^(註1)。さらに、「自分が正しいと思えば世のしきりに反しても、それをおし通すべきか、それとも世間のしきりに従ったほうがまちがいが無いと思うか」という問いに対し、「しきりに従う」と答えた人は、1953年から1983年までの7回にわたる調査で、1953年は35%だったがその後次第に増え始め、1978年には42%に増え、1983年は39%だった。反対に、「自分をおし通すべきだ」という考えの人は1953年には41%だったのに、1983年には29%に減少した。1950年代は「慣習の優位」が弱まったが、70年代から次第に「慣習の優位」が復権してきており、「世間」を意識する人が増えてきたことをうかがわせる。

この「慣習の優位」の状況を、David Riseman の用語を借り、福武は次のように述べている。

日本人は、近代になっても「伝統志向型 (tradition-directed type)」の人間として生きてきたが、戦後の現代において、「内部志向型 (inner-oriented type)」の人間に成長しないままに、「他人志向型 (other-directed type)」の人間に転化してきているともいえるのである。

福武は「世間」という言葉を取り立てて説明はしていないが、民主的な社会という器が与えられても、「世間のしきりに」従うべきだという「慣習の優位」の生き方が根強いということは、いまだに多くの日本人の言動が「世

間」に左右されていることの証左であると言えよう。

④ 中山治 (1988) ～臨床社会心理学の視点から～

中山は『「ほかし」の心理』という著書で、対人恐怖症のコミュニケーションの特徴を分析し、「恥」や「タテマエとホンネ」など日本文化論にも言及している。

断定的な表現を避け玉虫色に表現する「ほかし」というコミュニケーションの技法について、中山 (144-145) は主に次のように述べている。

人と人の間では不一致を生じることが多いのだが、それが度重なって意識されると「あいつとはどうも合わない」という感情が生じ、人間関係が疎遠になる。それを避けるために、相手との不一致を察した場合は、その不一致をできるだけ「ほかして」、婉曲に探りを入れ共通点を探しだし、一致を仮構し見せかけの同質性を高めている。日本社会で良好な人間関係を成立させ維持していくためには、コミュニケーションはできるだけ相手に合わせる事が原則であり、不一致を明確化して交渉によって解決しようという戦略はとられない。

「世間」を過剰配慮する人は、このような「ほかし」の技法を多用し、調和を仮構する傾向が強いのではないだろうか。

⑤ 阿部謹也 (1992～2002) ～西洋中世史研究の視点から～

西欧社会についての歴史的な研究をしてきた阿部は、日本には組織としての「社会」はあるが、その社会を構成しているはずの「個人」というものが西欧社会のように確立されておらず、人間関係は近代以前からの「世間」という非合理的で呪術的な関係を引きずっていると指摘し、日本社会における人と社会との関係性をとらえるためには、「社会」という西欧社会の言葉で論じても不十分であり、非言語系の知の集積である「世間」を対象化する研究が必要だと主張している。

阿部 (1995) は「世間」を「社会」と対比させながら、世間の主な特徴として「①贈与・互酬、②身分、③共通の時間意識」をあげている。①の贈与というのは、人間関係を良好に保つために年賀状を出しあったり、御中元や

お歳暮を贈る習慣を指している。西欧社会にもクリスマス・カードを出したり、結婚式にプレゼントをするなど贈与の習慣はある。しかし、日本では特に「互酬」という点が特徴である。キリスト教の教えでは聖書のルカ伝に書かれているように、お返しができないであろう貧乏人などにごちそうすれば、そのお返しの分は相手からではなく、天国で受け取ることができる点を強調しているため、必ずしも相手からの返礼を期待しない。だが世間では、人からなにかもらったら、それ相当のものを贈り返すという原則がある。②の身分というのは、世間では人々は平等ではなく、長幼の序があるということである。③の「共通の時間意識」とは日本では「この間はどうも」と過去に選ってお礼を繰り返し、時間が経ってもその恩を忘れずにいることが好ましいとされることを言う。この風習について、直塚玲子(1980)は「この間はどうも」という謝意は欧米人には奇妙に感じられると述べている。そのわけは、まず欧米では謝意を述べるのはその場限りだということ、次に何に対する感謝かを明確に言わず漠然と謝意を述べることはしないからだと説明している。阿部は「世間」では繰り返し謝意を述べることで、その人との関係性が継続できると述べている。

さらに阿部は、「世間」について次のように定義している。

世間とは個人個人を結ぶ関係の環であり、会則や定款はないが、個人個人を強固な絆が結び付けている。(中略)自分と関係がある集団とは、例えば、同窓会や会社、政党の派閥、趣味の集まり、大学の学部や学会などの形をもつものと、隣近所のように形をもたないものだ。(阿部、1995:16-17)

世間とは自分と利害関係がある、あるいは今後利害関係をもつであろう人間の集団の全体をいう。(阿部、2002:25-26)

また、阿部(1995:175-179)は「世間」と「社会」の相違点を次のような示唆に富んだ説明している。

世間や世の中という言葉は古くから使われてきたが、社会という言葉は、西欧風の法・社会制度を取り入れる努力をはらった明治期に(1887年)に society の訳語として作られた。society という言葉は、個人の尊厳と不可分であり、その意味をこめるためには「世間」

はふさわしくなかったのだ。(中略)日本では「社会」という語は、個人の尊厳とは切り離されて、法、経済制度やインフラの意味で用いられている。

阿部(1992:140)はさらに、社会は『六法』が示すように理性にもとづいて構成されていることになっており、個人と社会は合理的な関係をもっているはずだが、世間には個人と社会の合理的関係がなく、人々と世間を結び付けているのは理性ではなく義理・人情という呪術的な人間関係だと述べている。

⑥ 氏家洋子(1996)～言語文化学の視点から～

氏家は「言語文化学の視点－「言わない」社会と言葉の力－」という著書の中で、言葉と精神の不可分の関係に注目した言語文化学の原点について次のように述べている(氏家、まえがき)。

人は或る歴史をもった社会に生まれてくる。そこで母語として身に付ける言葉にはその社会の先人が環境の中でどう生き、ものを見、工夫をしてきたかが刻み込まれている。言葉を身につけることはその社会の先人の営んできた精神活動を、そして、それが何十世代にもわたり受け継がれてきた総体としてある精神文化を、自分のものにするのである。

私達はこの言葉を習い覚えることで、生きる上での指針を得ると同時に、制約をも引き受けることになる。言葉と人の精神の在り方とはこのように不可分の関係にある。

「世間」という言葉を多用する人の精神は、どのような拘束を受けるのであろうか。太宰治の『人間失格』の中で、葉蔵の女道楽を「これ以上は、世間が、ゆるさないからな」と言ってたしなめる堀木に対し、葉蔵が「世間とは、あなただ」「世間とは個人だ」と見抜いた、というくだりがある。氏家はこのくだりを取り上げて、時枝誠記の意味論を使いながら、「世間とは個人だ」という論理がなぜ成り立つのかを以下のように説明している(氏家、p166)。

「世間とはあなただ」「世間とは個人だ」と気付いた時の葉蔵は、

「世間が許さない」と言うのはあなたの把握の仕方だろう、僕はそういう把握の仕方はしないと考えた。そのような発話をするのは当人がそのような把握をしたことの証しなのだと言葉は悟った、となるだろう。だから、「世間」という語を使って自己の意見を述べる個人なしに、「世間」などどこにも存在しない、ということになる。「世間」という表現がなされるのはその語を意味づけして使う個人によってなのである。かくて、「世間とは個人である」ということが成り立つのである。

氏家は、「世間」という言葉が在るということと、その語を使うということは別物であり、その語を発する以上、その語の指し示す対象把握の仕方に何らかの意味で相当コミットしていることが前提だ、と述べている（氏家、p166）。これに関連して、後述の佐藤（2001：18）は、世間は一種の共同幻想で、「ない」と思えばそれは「ない」ということもできるようなものだ、と述べている。つまり、「世間」というものは、だれにとっても明らかな形で在るのではなく、在ると信じて「世間」という言葉を多用する人にとっては確かに存在するが、「世間」という表現を用いない人々にとっては、「世間」は存在しないことになる。これに対し「社会」という言葉の用法は「世間」のように、「ないと思えばないとも言える」とはいかない。個人の把握の仕方によって、「在る」とも「ない」ともいえる点が「世間」の大きな特徴といえる。次章で、「社会」と対比させた「世間」の用法の違いを考察したい。

⑦ 佐藤直樹（2001～2002）～刑事法学、犯罪現象学の視点から～

佐藤（2001）は前述の阿部の主張を踏まえ、犯罪現象学の分野で「世間」というシステムが日本社会の日常的な〈生活世界〉において、人々の行動を規制する原理として機能していると指摘する。その『「世間」の現象学』という著書のなかで、日本は明治期から進められた近代化によって西欧型「社会」にとってかわられるはずだった「世間」というシステムが、資本主義の中世化にともない近年いっそう肥大化していることを、隣人訴訟や文京区女児殺害事件などの具体的な問題群に則して検証している。

端的に言えば「世界とは自分のことなのだ」という現象学の方法を用いて、佐藤は「世間とは自分のことなのだ」という答を導き、「世間」とはそもそもそういう観念を生み出している「自分」の側にあり、それゆえに「世間」を

問う困難さとは畢竟「自分」を問う困難さのことなのだと指摘している。

佐藤は、阿部の「世間」についての特徴づけを踏襲しながら「世間」と「社会」を対比させて、以下のような特徴づけをしている（佐藤、2001：94-97）。

| 〈社会〉 | 〈世間〉 |
|-------------|----------------|
| ・契約関係 | ・贈与・互酬の関係 |
| ・個人の平等 | ・長幼の序 |
| ・個々の時間意識をもつ | ・共通の時間意識をもつ |
| ・個人の集合体 | ・個人の不在 |
| ・変革が可能 | ・変革は不可能 |
| ・個人主義的 | ・集団主義的 |
| ・合理的な関係 | ・非合理的・呪術的な関係 |
| ・聖／俗の分離 | ・聖／俗の融合 |
| ・実質性の重視 | ・儀式性の重視 |
| ・平等性 | ・排他性（ウチ／ソトの区別） |
| ・非権力性 | ・権力性 |

「世間」とは自分の頭の中にある概念であり、その自分の作り上げた概念を使って「世間に後ろ指をさされないように」とおびえつつ、世間は変えられないものだと思うのは何故なのか、本稿の次章で考えたい。

⑧ 田中史郎（2002）～日本経済論の視点から～

田中は日本経済の発展と社会のしくみから、「世間」が戦後どのように再浮上してきたかについて論じている。戦後の日本は農地改革、財閥解体、労働の民主化、そして教育改革が実施され、制度と理念の両面から「世間」の論理が解体され、「社会」の論理が推進された。この制度上の「社会」の枠組みに実体を与えたのが、長期にわたる高度経済成長だったという。経済的パイの拡大ゆえ、地縁や血縁の「しがらみ」に縛られることなく、「ゼロからのスタート」の新規事業を起こすことが比較的容易であったのだ。

しかし70年代の低成長期に入ると事態が逆行した。いわゆる「ゼロ・サム社会」になると、もはや増大しないパイをめくり、縁故・特権・既得権などを使いあうことになった。そこで、「世間」の論理が再形成されたのだと述べている。この「世間」の再浮上現象は、前述の福武が指摘する70年代からの「慣習の優位」の強まりと一致している。

2-3. ディスカッション

これらの先行研究には興味深い指摘が数多く含まれている。これらの知見をもとに、「世間」と「社会」の違いを日本語学習者に分かりやすく一言でまとめると、「世間はまわり、社会は組織」と言える。「世間」は自分のまわりを取り囲む人々であり、その人々を自分がどう意識するかは主観的な問題である。一方、「社会」は自分を中心とした概念ではなく、客観的な基準で存在するものである。この違いを出発点として、日本語学習者に「世間」と「社会」という概念の違いをより具体的に教えるために、次に「世間」と「社会」の特徴について考えることにする。

3. 「世間」の用法 ～「社会」との対比から～

3-1 「世間」の特徴

上述の知見をもとに、「世間」と「社会」の用法についてまとめてみると、次のような対比ができる。

| | 〈世間〉 | 〈社会〉 |
|------------|--------|------|
| ① 自分は含まれるか | No | Yes |
| ② 範囲は一定か | No | Yes |
| ③ 組織があるか | No/Yes | Yes |
| ④ 変えられるか | No | Yes |

この「世間」と「社会」の対比について、言葉の使い方の面から以下で考察する。

① 自分は含まれるか

「世間」も「社会」も人々の集団を指すが、その集団の中に自分も含まれるか、という点で「世間」と「社会」は異なる。「社会」は、個人が集まって社会を作るのだから、個人は自分の帰属する社会の中で「社会の一員」であり、その社会を「私たちの社会」と呼べる。他方、「世間」においては、人は自分の「世間」の中で「世間の一員」にはなれないし、自分の世間を「私たちの世間」と呼ぶこともできない。また、「社会」は自分たちが作りあげるものだから、「みんなが幸せに暮らせる社会」と言えるが、「みんなが幸せに暮らせる世間」とは言えない。「世間」は自分たちが作り上げるものではないし、「世間」に自分が含まれないということは、次のような世間を用いた表現

で一層明らかである。

両親はやさしく仕事も充実しているので、べつに結婚したいとは思わないし、結婚したい人にもめぐりあっていない。でも、世間がうるさいので、そろそろお見合いでもすべきかと悩んでいる。

ここで言う「世間」とは、自分と両親は含まれない。1-2②の井上の引用で述べたように、「世間」とは、ウチとソトの中間の人々のムレを指している。赤の他人でもなく、いつも自分のまわりにいる他人こそが「世間」である。自分を除外した自分のまわりの人々だからこそ、「世間に後ろ指をさされる、世間の口に戸は立てられない、世間の指弾を浴びる、世間の目を気にする、世間に顔向けができない、世間を騒がせる、世間並み」という言い方が成り立つのだ。

「社会」は自分を含むが、「世間」は自分を含まずまわりの人々を指すという点に関連して、森田良行(1987: 47-48)は、「人」という言葉の使われ方を他人と自分のかかわり合いという視点から次のように表している。

日本人はどうも自分中心に物を見る癖があるらしい。自分も当然その中の一員であるはずなのに、自分を含めた対象として考えない。それどころか、自分の外の事物でもあるかのように眺めて、自分との関係でそれを理解しようとする。

たとえば、「人」がそうだ。日本語で「人」と言うと、「人のふり見てわがふり直せ」とか、「人事とは思えない」「人目を忍ぶ」「人づきあい」さては「人助け、人騒がせ」と、人を使った語は多いが、いずれも“他人”の意だ。いわゆる“人間”を表す「人はパンのみにて生きるにあらず」など、これは新しい翻訳的な使い方、本来は自分から見て他人を指す。

最も基本的な「人」のような単語でさえ、日本人は、自分の周囲にいる人物としてとらえ、それと自分とを対比させようとする。人の集合である人々に対しても、同じようなとらえ方をする。

上述の、翻訳的な「人」と日本語本来の「人」の使われ方の相違は、そこに自分が含まれるかという点で「社会」と「世間」の相違と符号する。人は

「社会」の一員として社会に帰属するが、「世間」は自分のまわりの人々を指し、そこに自分は含まれない。

②範囲は一定か

「社会」は、例えば「上流社会」「イスラム社会」「文明社会」「高齢化社会」というように、客観的な基準でそのテリトリーを規定できる。しかし、前述した1-2②の井上の引用にあるように、「世間」のテリトリーを規定する基準は個々人の主観のがわにあるから、どこからどこまでが「世間」なのかあいまいで、漠然としている。

例えば、筆者は「日本社会」に属しているが、筆者がいてもいなくてもその「日本社会」の範囲は変わらずに存在する。しかし、「世間」とは、自分にとって気になるまわりの人々の集合体だから、自分がいなくなれば当然その「世間」は消えるし、自分のつきあいの範囲の変化によって「世間」は広くなったり狭くなったりする。「世間の目」を気にする場合も、実際にその世間の範囲は、職場の人々、学生時代の友達、近所の人々、親類の人々など、その人のつきあいの広さによってさまざまな世間がある。

「社会」の範囲は一定であるが、「世間」の範囲は人によって異なるという特徴は、さらに他者と共有できるかという点でも違いを生じる。「社会」は「日本社会」というように、その社会のメンバーと同じ「社会」を共有できる。しかし、「世間」はその世間を構成する人々と全く同じ世間を共有することができない。

このように世間は範囲が不確定であるため、佐藤が前述したように、世間はないと思えばないともいえるものなのだろう。

③組織があるか

1-2⑤で阿部が指摘しているように、「社会」は法律や経済にもとづく組織の意味で用いられている。「社会」は「社会組織」があり、「社会の原理原則」、「社会制度」、「社会政策」、「社会事業」があり、「社会のリーダー」が「社会をまとめる」役割を果たす。一方、「世間」には「世間組織」も「世間の原理原則」も「世間制度」もなく、「世間のリーダー」も存在しない。このように「世間」には「社会」のような正式な持続的なしくみがないという意味で「世間には組織がない」と言える。

しかし、「世間が許さない」という表現が示すように、「世間」という集団

はある種の制裁力を持っている。「社会」は明文化された法があるが、「世間」にも「世間の掟」があり、この掟は明文化されていない暗黙のルールである。この掟を破ればまわりの人々から信用を失い、ともすれば非難をあげて世間の制裁を受けることになる。法律的には許されても、世間が許さないという事例は、佐藤（2001：170～）の「隣人訴訟をめぐって」に詳しい。世の中には法律的には許容されることでも、世間の掟では許されないこともある。そのような場合は、「世間が黙っていない」ことになり、個人は世間という集団となって騒ぎたて、「世間が許さない」ことを示す。このように、個人対個人ではなく、世間という集団になって非難するという点で、世間にも世間の掟にもとづいた一種の組織力があると言うことが可能であろう。

「社会の法律」は、法律が改正される場合はいつどのような手続きを経て変わるのかが、世の中にはっきりと知らされる（はずである）。しかし、「世間の掟」は暗黙の了解事なので、世の中の変化に伴いいつのまにかなんとなく変わっていくものである。この点は次に述べるように「社会は改革できるが、世間は変えられない」という違いも生じる。

④ 変えられるか

「社会」は組織であり、個人は「社会の一員」であるから、今の「社会に不満」があれば自分たちの理念にふさわしいリーダーを選び、「社会制度を変革」し「社会の方向性を変える」力があると、少なくとも民主主義社会では信じられている。

ところが「世間」はどうであろう。「暗い世間」はいやだから、「明るい世間を作る」ために、さまざまな「世間運動」を行ない、「世間の一員」として「世間の発展」に寄与することができるだろうか。否。世間は、個人の手のつけようもないもので、変えることも発展させることもできない。人の手のとどかないところにあり、こちらはひたすら「世間様」と呼び怖れつつ、暗い世間をあきらめるしかないらしい。佐藤（2001）は、「世間」では「しかたがない」が蔓延しており、「閉塞感」や「息苦しさ」を加速させているが、日本人にとって「世間」は変えられないものとされるような権力性をもつ、と述べている。

では、どうして日本人は息苦しい世間を変えられないもの、しかたがないものと受容しているのだろうか。それについて、ウォルフレン（1994：250-252）は、要約すると次のような解釈をしている。

「文化」は二つの意味がある。一つは、共同体の慣習にしたがって通常おこなっていることのすべて、世代から世代へと継承された行動パターンの全部を指す。子供が家庭や学校で教え込まれることでもあり、大人が社会との交渉をつうじてその存在を確認するものでもある。その意味では、日本人がそうするのは、すなわち、そうするからだ、と言っているようなものだ。

もう一つの文化は、芸術、言語、宗教など国民の共有財産であり、この立派な財産を攻撃・破壊することは冒涇である。

前者の文化を「文化①」とし、後者を「文化②」というように、これら二つの文化は明確に区別されなければならない。しかし、日本人は「文化①」と「文化②」を混同し、「文化①」も神聖なものと同錯覚し、慣習を変えることは神聖な文化を侵すことだと思われている。そこで、社会を変革しようという提案は茶道を日本人の生活から抹殺すべしとか日本語から漢字を追放すべしなどという提案と同じに扱われてしまう。その結果、ある慣習が悪習であっても、それは日本の普通で習慣的な文化であるから変えられない、いやでも「シカタガナイ」という結論になる。

ウォルフレンの言う「文化①」は、換言すれば「世間のしきたりに従う行動パターン」である。「世間のしきたり」と「日本の伝統文化」を混同し、世間の悪習も変えるべきではないという盲目的な風潮があるのは、「世間」が明確な組織や制度のないあいまいな集団であるため、世間のしきたりが変革されにくいことも一因であろう。「世間」を強く意識する人々にとっては、たとえ悪習であっても、それも風習だから変えられないと思込み、ままたらぬ世の中だけど、なんとかこちらが世間に合わせるしかないという生き方になっているのではないかと筆者には思われる。

3-2 世間的な発想の弊害と利点

これまで「世間」と「社会」の特徴について考察した。これらをもとに、日本語学習者に「世間」と「社会」の概念の輪郭を教えることができる。日本語の授業で、学習者の認識をさらに深めるために「世間」と「社会」についてディスカッションさせたい。ここでは、そのディスカッションの材料と

して、世間的な発想のメリットとデメリットについて考察する。

3-2-1 世間的な発想の弊害

近代になり、日本にも社会という翻訳語が作られて久しいが、「社会」の概念というものは人々のものの見方に根付いてはいないのではないだろうか。社会生活の中で「世間的」な発想をする弊害として次の三点があげられる。

- ①社会を変革できないと思いつむ
- ②みんなに合わせて、「みせかけの和」をつくり、異質を排斥する
- ③確固とした信念を持ってない

これらの点について、以下に述べる。

① 社会を変革できないと思いつむ

2-1④で考察したように社会は変革できるはずだが、世間は変えられない。そして、世間は変えられないという消極的な態度は、そのまま、市民であるはずの個々の人間には、社会の政治的な問題も変えられないという消極的な態度に繋がり、おそれべきリーダーは世間様であると考えられているようだ。どうせ表向きの社会のリーダーがだれになろうとままならぬ世の中は変わらない、だから選挙にも興味がなく、社会はちっとも生きやすく変革できないだろうし、社会道徳も育たないだろう。

自由な個人としての判断力をつけていくために必要なことは、世間やまわりに対して恥ずかしいかどうかを判断の基準にするのではなくて、自分の内部に善悪の基準を作っていくことだ。そうすれば、悪習を「しかたがない」と諦める心的態度から、自己の判断にもとづいて自分の意見を述べ、他の人々と議論するなかで集団の合意を形成し、その結果自分は社会の一員として社会を変えていけるという積極的な態度に変わっていくのではないだろうか。

② みんなに合わせて、「みせかけの和」をつくり、異質を排斥する

前述の中山が指摘する「ほかし」の手法によって仮構された「みせかけの一致」が日本社会に多く存在することを、ウォルフレン（同書、256-259）は「相互不信があまりに不足しているというまさにそのために、日本は調和社会だというきれいごとをひととき強調してきたのではないか」と厳しく批判

している。さらに、中島義道（1997：181）は、「みせかけの一致」は対立を認識せず殺害する精神であり、このことが日本人から対話する力を奪っていると述べている。深い議論は避け相互不信のまま、仲間との同一性を強調しながら他者にも過度な同一性を期待する特性を見て、星野博美（p. 244）は「このいわば同一性渴望症は、ある程度均質化してしまった社会の末期症状のように私には思える」と述べている。さらに精神科医の香山リカ（p. 143）は、みんなからちょっとだけ注目されるのはいいが、個性的になりすぎてみんなから浮いてしまうのを嫌がる傾向が今の若者に見られると述べている。

日本人のおよそ9割が中流意識をもって暮していると言われるのは、このようにまわりの人々である「世間」を過剰に気にして「世間並み」に落ち着くことを第一義として生きている結果なのだろう。世間並みを目指し、世間とのわずかな差異を敏感に感じるという生き方は、同時に異質な者を排斥し、いじめや差別という行動に容易につながってしまう。みせかけの和やみせかけの同一性にしがみつくとかがいったいどれほど人や社会を幸せにするのかは、疑わしい。

③ 確固とした信念を持ってない

「世間」では、「長いものにはまかれろ」という諺があるように、相手が自分より年齢や地位が上なら、疑問があっても理由を問いたださず黙って従わなければならないとされている。もしも、理由をたずねたりしたものなら、「理屈を言うな」で済まされる。何故なのかという理由を追求せず、とにかくそうすべきだという言い方が日本語にある。「どうしてそうするの」と子供に聞かれて、親は「そうするから、そうするんだ」と言っておしまいにすることはないだろうか。どうしてなのかという理由を深く考えようとせず、ともかくみんながそうするから、自分もするのが無難だという傾向が日本社会でよく見受けられる。世間を気にする人は自分の主義主張を貫くのではなく、「まわりから浮きたくない」「世間みんなのすることだから」「世間に逆らいたくない」というように、まわりの人々、つまり「世間」にうまく合わせる事が第一義となる。

理由を追求しようとしめない態度は、自己の信念が育たない。ルース・ベネディクト（前掲書、p198-199）は、日本人は変わらぬ信念に基づき行動するのではなく、今この状況ではどんな主義主張を手段とするのが得策であるか、形勢を観望して判断する、と述べている。だから世の中の形勢が一変すれば、

それまでの自分の主義主張はするりと捨て去り、新たな主義主張を身にまとう。そう見ると、世間にあわせる生き方をしている人々というのは、世間の目に怯えながらも、一方ではしたたかに「世間」の指針が変わったことを合理的な理由として、自己の信念を覆しても自己矛盾に陥らずに時勢にあわせて生きていけるのではあるまいか。「これからの時代は…だから」を合い言葉に、確固たる信念なしに指針の転換を推進しているように見える。

3-2-2 世間的な発想の利点

日本には西欧における個人と社会の関係とは異なり、「世間」が強く意識される傾向があるが、これはマイナス面ばかりではなく、プラス面もある。その主な点として、次の三つがあげられる。

- ①社会の道徳を教えることができる
- ②相手に対しての気配りが豊かだ
- ③まわりと歩調を合わせ団結力が強い

「世間」の良い面について、以下に述べる。

①社会の道徳を教えることができる

日本の「社会」は法や経済の組織であるから、「社会が許さない」と言えば、それは主に違法行為のみを指すことになる。しかし、昔から日本社会で尊ばれてきた道徳は、法律的な善悪ではなく、自分の心の問題として世間に恥じない生き方をすることだ。その道徳は個人を神に対峙させる代わりに、「世間様」に恥ずかしくない生き方をすることである。山藤章二（2000：223-225）は、「世間がヘン」というエッセーのなかで、最近の日本には法律的にはともかく、世間的には、みっともない人間、きたない人間、はしたない人間が増え、恥の概念から発した美意識が消えつつあると嘆いている。

現代の日本社会において世間は消滅しつつあると、三浦展（1999）はみている。三浦は戦後、アメリカ社会を真似た郊外の住宅に暮す人々は、もはや戦前のムラの社会的近所のつながりがなく、近所の子どもが悪さをしてもそれを注意する大人がいなくなったことなどを例にとり、このような郊外型住宅での生活に、「世間」の縛りはなくなったと言うのだ。

だが、はたして「世間」は消えつつあるのだろうか。たしかに、「世間」と

いう言葉はだいぶ古臭くなったため、最近の親が子供を躱けるとき、「世間に恥ずかしくないように」とは言われなくなっているだろう。しかし、若い人たちのあいだでは、2-2②で述べたように、まわりから浮きたくないという同一性渴望症が見られ、他人の目を過剰なまでに気にする傾向は衰えていない。その意味では、「世間」はまだ存在しているといえる。変化してきているのは、若い世代が自分のまわりの人々を表すのに「世間」ではなく、「仲間」とか「まわり」、「みんな」という言葉を用いる点だろう。この変化には、重要な違いを生じると思われる。その違いは、「世間」は自分と同世代の人々だけでなく不特定多数の老若男女が含まれているのに対し、「仲間」「まわり」「みんな」という言葉が表す他者は、ほとんどが自分と同世代で、よく知っている人々に限定されることに起因する。「世間」が不特定多数の老若男女であるがゆえに、「そんな恥ずかしいことをすると、世間様に笑われますよ」とか「そんなことを言っても世間では通用しない」などと、子供の言動をたしなめることができる。しかし、「世間」の代わりに、「仲間」「まわり」「みんな」などを使ったらどうだろう。親が子供に「そんなことを言っても、仲間では通用しない」などとは言えまい。現代は親が子供に道徳を教えるとき、「世間に恥ずかしい」の代わりに、どのような言葉で教えればよいのかがぼやけてしまっているように思える。

②相手に対しての気配りが豊かだ

世間の目を気にしている人は、まわりを不快にさせないように常に気をつけ、まわりの人々への細やかな気配りがある。相手がどうしてほしいのかを上手く察することができ、思いやりがあり、気が利く。また、ほどほどの遠慮があり、相手にとって迷惑をかけないように気をつける。

しかし、これらの配慮は、自分と利害関係がある相手に限定される場合も少なくないため、打算的な親切という面も否定はできない。

③まわりと歩調を合わせ団結力が強い

日本の経済成長をもたらしたのは、家族主義的な団結力の強さだと言われているが、「世間」的な発想をする人はまわりに合わせようとし、まわりと協調するのがうまい。それが、たとえみせかけの調和だと批判されようとも、集団内のまとまりがよく団結力が強いことは確かだ。さらに、「世間」的な発想では、上位者や年長者の言うことには素直に従うことができる。

「世間」という概念を日本語学習者にどう教えるか

主に以上が、世間的な発想の弊害と利点である。「世間」とは何か、ということを先行研究や、「社会」との用法の対比からさぐってきたが、これらの考察をもとに次に、実際の授業案を考えてみよう。

4. 日本語学習者に「世間」の概念や用法をどのように教えるか

(教案)

「1. はじめに」の部分で触れたように、筆者は日本語の鍵概念を示す言葉の理解を通して、日本のコミュニケーションの特徴を理解させることを目標とした、「日本語会話」の授業を行なっている。対象学生は、日本語力が中級レベルの日本語学習者とボランティアの日本人学生で、授業時間は週1コマ(90分)である。ここでは、鍵概念の一つである「世間」をとりあげ、この言葉の概念や用法を講義形式で教えるのではなく、ディスカッションを多くとりいれ、学生たちにこの言葉の特徴を気付いてもらいたいと思う。2コマ(90分×2回)の授業時間を想定し、以下のような教案を考えた。

● <1コマ目の授業>

1. 「世間」の概念や用例を、「社会」との対比で示す

a) 「世間」と「社会」の意味：

「世間」という言葉は古くから使われているが、「社会」はおよそ100年前に society の訳語として作られたものだ。Society という言葉には「個人の尊厳」が不可欠だが、「世間」という言葉にはその意味がない。

辞書で調べると、「世間」も「社会」も society, world という意味があり、違いがわかりにくい、「世間はまわりの人々」であり、「社会は法や経済の組織」という違いがある。

b) 「世間」と「社会」の用例：

「世間」と「社会」は入れ替えられないものがほとんどだということを学習者に教えるために、以下の用例の意味や使われ方を説明する。

「社会」の用例

- ・社会制度を改革する。
- ・明るい社会を作ろう。

- ・社会のリーダーを選ぶ。
- ・社会の一員となる。
- ・社会勉強のために、アルバイトを始めた。
- ・日本社会、欧米社会、上流社会、イスラム社会
- ・大学を卒業して、社会人になる。
- ・ボランティアで社会奉仕活動をする。
- ・社会の法律を守る。
- ・少子化が進み、深刻な社会問題となっている。
- ・日本は高齢化社会になりつつある。
- ・社会事業を増やして、経済を活性化させる。
- ・スウェーデンは社会福祉が発達している。
- ・日本は年功序列の社会だ。
- ・弱肉強食の競争社会に生きる。
- ・大人には社会的責任がある。
- ・子供が小学生になったら、また仕事を始め社会復帰したい。
- ・大学で社会学を専攻する。

「世間」の用例

- ・同棲なんてしたら、世間がどう思うか。
- ・万引きなんてことをしたら、世間に恥ずかしい／世間に顔向けができない。
- ・私の親は、私の就職や結婚について世間の目を気にしている。
- ・結婚したい相手はいないし、親は何も言わないけれど、世間がうるさいのでお見合いでもしようかと思う。
- ・最近では、職場でバレンタインデーには女性職員が男性職員に義理チョコを贈るのが、世間のならわしになっている。
- ・悪いことをして、世間に後ろ指をさされる。
- ・電車の中でお化粧をしたり、ジベタリアンなどの行為は、社会の法律には触れないが、世間ではみっともないことと言われる。
- ・会社の役員が不正をしたことがばれたときは、たいてい「世間をお騒がせして申し訳ありません」と謝る。
- ・ぜいたくはできなくても、せめて世間並みの暮しがしたい。
- ・あの人はお金に不自由せず、働いたこともないので、大人だけれどまだ

「世間」という概念を日本語学習者にどう教えるか

世間知らずだ。

- ・あの人は世間が広くて、ものしりだ。
- ・自分の意見を強く主張するより、世間にあわせたようが無難だ。
- ・仏滅には結婚式をしてはいけない、というのは世間のしきたりだ。

2. スキットの制作

留学生と日本人学生を混ぜた小グループをいくつか作る。それぞれのグループは、「世間」と「社会」のどちらかのテーマに分けてスキットを作る。スキットでは、上記の用例で学んだ「世間」という表現や、「社会」という表現をいくつか使い、それらの表現がどのような文脈で使われるのかが分かるようにする。

●〈2コマ目の授業〉

1. スキットの発表

「世間」を使ったスキット、「社会」を使ったスキットをクラスで発表させて、「世間」や「社会」という言葉が実際にどのように使われるのかに注目させる。また、「世間」や「社会」という言葉が、スキットの中のそれぞれの表現において、入れ替えができない点についても注意する。

2. ディスカッション

- a) 「世間」と「社会」の特徴をさぐるため、小グループで下の枠の質問(1)～(4)について考えさせる。

以下の質問について、グループで話し合ってください。
(ヒントに示された例の「社会」は、「世間」には置き換えられません。)

質問(1) 自分は含まれるか?

(ヒント) 「社会の一員」、「私達の社会」

質問(2) 「世間」や「社会」の範囲は一定か?

(ヒント) 「日本社会」「イスラム社会」

質問(3) 「世間」や「社会」に組織があるか?

(ヒント) 「社会組織」「社会制度」「社会政策」
「社会事業」「社会のリーダー」「社会の法律」

質問(4) 「世間」や「社会」は変えられるか?

(ヒント) 「明るい社会を作ろう」「社会運動」
「社会の発展」「社会改革」「社会を変えよう」
「社会の変化にしたがって」

- b) 「世間的」な発想の弊害と利点について、グループでまとめてください。
c) 「世間」に近い言葉として、「まわり」や「みんな」などがあり、次のような表現があります。

- ・まわりから浮きたくない
- ・まわりに合わせたほうがいい
- ・みんなと同じが無難
- ・みんなに変に思われたくない

上のような表現は、どんな場面で使われると思いますか。グループで話し合ってください。

5. 結 び

以上、「世間」という言葉をできるだけわかりやすく日本語学習者に教えるためには、どうしたらよいかという目的意識で、「世間」という言葉の分析を試みた。「世間」という言葉を、その類似語である「社会」との相違点を対比させることにより、「世間には自分が入らず、その範囲はあいまいで、明

確な組織はなく、変えることができないものだ」という世間像が浮かび上がった。

日本では society の訳語として「社会」という言葉が約100年前に作られたが、多くの人はいまだに個人と社会という発想よりも、逆らえない世間に合わせようという発想が根強いように思われる。

本稿では日本文化の特徴とされる「恥」を理解する手立てとして、「世間」という言葉の分析を試みた。日本は「罪」ではなく「恥」の文化だと言われるがこのステレオタイプを鵜呑みにするのではなく、自分のまわりの人々は実際どのように「恥」を感じて、「世間に恥じない」ことを行動の原理としているのかを、日本語学習者自身が日本人とのやりとりのなかで観察し分析するという、異文化理解の手法を身につけていくことが必要だ。そのために、日本的な文化の特徴を理解する材料として、日本語の授業のなかで、日本文化の鍵概念を示す言葉の概念や用法を積極的に教えたいと思う。本稿では、「世間」をとりあげたが、今後「世間」という概念の教え方について試行錯誤を繰り返す必要がある。また、さらに他の言葉についても考察を加えたい。

注

(1)福武(1993:135)が、NHK放送世論調査所編『図説戦後世論史』第二版、1979年、日本放送出版教会から、統計数理研究所の国民性調査を引用している。

参考文献

- 阿部 隆也 (1992) 『西洋中世の愛と人格：「世間」論序説』朝日新聞社
阿部 隆也 (1995) 『世間とは何か』講談社現代新書
阿部 隆也 (1997) 『「教養」とは何か』講談社現代新書
阿部 隆也 (1999) 『日本社会で生きるとのこと』朝日新聞社
阿部 隆也 (2001) 『学問と「世間」』岩波新書
阿部 隆也 (2001) 『日本人はいかに生きるべきか』朝日新聞社
阿部 隆也 (2002) 『世間学への招待』音弓社
氏家 洋子 (1996) 『言語文化学の視点 -- 「言わない」社会と言葉の力』おうふう
奥村 隆 (1998) 『他者といふ技法 -- コミュニケーションの社会学』日本評論社
香山リカ (2002) 『若者の法則』岩波新書
木村 敏 (1981) 『人と人との間 -- 精神病理学的日本論』弘文堂
木村 敏 (1994) 『心の病理を考える』岩波新書
佐藤直樹 (2001) 『「世間」の現象学』音弓社
佐藤直樹 (2002) 『「中間的」共同幻想としての世間』阿部隆也編『「世間」の現象学』

青弓社

滝浦静雄 (1990) 『「自分」と「他人」をどうみるか -新しい哲学入門』

日本放送出版協会

太宰 治 (2002、初版は1948) 『人間失格』岩波文庫

田中史郎 (2002) 『いま、なぜ世間なのか --戦後日本における経済社会
構造の変容から』 阿部隆也編 『「世間」の現象学』 青弓社

土居健郎 (1971、新装版2001) 『「甘え」の構造 (新装版)』 弘文堂

直塚玲子 (1993、初版は1980) 『欧米人が沈黙するとき』 大修館書店

中島義道 (1997) 『「対話」のない社会 -思いやりと優しさが圧殺するもの』

PHP 研究所

中山 治 (2001) 『「ほかし」の心理 -人見知り親和型文化と日本人-』 創元社

中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係』 講談社現代新書

福武 直 (1993、初版は1981) 『日本社会の構造』 東京大学出版会

星野博美 (2001) 『銭湯の女神』 文芸春秋

牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学 -文法を文化で切る-』 アルク

丸山真男 (1961) 『日本の思想』 岩波新書

三浦 展 (1999) 『「家族」と「幸福」の戦後史 -郊外の夢と現実』 講談社現代新書

森田良行 (1987) 『日本語をみがく小辞典〈名詞編〉』 講談社現代新書

山藤幸二 (2000) 『世間が「ヘン」』 講談社

米山俊直 (1976) 『日本人の仲間意識』 講談社現代新書

ウォルフレン、カレル・ヴァン (1994) 『人間を幸福にしない日本というシステム』

毎日新聞社

J. オースティン (坂本百大訳) (2001、初版は1978) 『言語と行為』 大修館書店

セルジュ・ティスロン (大谷尚文/津島孝仁訳) (2001) 『恥 -社会関係の精神分析』
法政大学出版局

ホール、E.T. (岩田慶治・谷泰訳) (1993、英語版は1976) 『文化を超えて』

ディーピーエス・ブリタニカ

D. リースマン (加藤秀俊訳) (2000、第1刷は1964) 『孤独な群像』 みすず書房

ルース・ベネディクト (長谷川松治訳) (1972、英語版の初版は1954)

『菊と刀~日本文化の型』 社会思想社